（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（経済学）	氏名	渡部 暢
論文題目	不確定性下における価値実現に向けた構想形成プロセス ―定性研究から読み解く創発と計画の関係性―		

（論文内容の要旨）

本研究は，不確定性下における構想形成プロセスについて検討した研究である。本研究はこの問題を解き明かしていく上で，特に創発と計画の関係に焦点を当てて議論している。この論文では，不確定性という概念を不確実性やあいまいさなどの概念と区別して提示したうえで，不確定性下で価値実現をもたらす構想がどのように形成されていくのかという問いを立てている。この問いに答えるため，複数事例による事例研究を方法として採用している。製品開発マネジメント，新規事業開発のマネジメント，創造性のマネジメントという３つの異なった文脈での事例研究を通して，構想が、製品や事業などの人工物が形作られる際に，それと並行して創発的に形成されていくことを示している。

研究概要と研究課題を記した第１章，及び，先行研究レビューを記した第２章に続く，第３章では，花王の化粧品開発プロジェクトを題材として，製品開発に関する構想形成プロセスおよび構想形成と関係を持つニーズについて検討を行った。その結果，製品開発の構想と関係を持つニーズには，「大枠のニーズ」と「ソリューション・ニーズ」という粒度の異なるニーズが，それぞれの段階で異なった役割を果たすことを示した。そして，不確定性下における製品開発に関する構想は，大枠のニーズに従って確立された計画をガイドとして活用し，そのガイドに従って研究を推進しながら創発的学習を繰り返し，ソリューション・ニーズを捉えていくというプロセスによって段階的に形成されることを明らかにした。

続いて第４章では，大学発ベンチャーN社の事業創造プロジェクトを題材として，新事業創造に関する構想形成プロセスおよび構想形成と関係を持つニーズについての検討を行った。その結果，プロジェクトの各段階において粒度の異なるニーズを踏まえた計画を外挿しながら，不確定性下における新事業の構想が創発的な学習を繰り返していくことによって形成されることを示した。また新事業の構想形成と関係を持つニーズには，全体的な道筋を示す「大枠のニーズ」，探索の方向を示す「アジャストメント・ニーズ」，そして目的地を示す「ソリューション・ニーズ」という粒度の異なるニーズが，それぞれの段階で異なった役割を果たすことを示した。

そして第５章では，コムデギャルソン社の前衛的なデザイン創造プロジェクトを題材として，創造的なデザインが如何に実現されるのかという問題についての検討を行った。その結果として，創造的デザインが，個と集団との相互作用を通じてコンセプトとデザインが同時に形成される「創発的形成モデル」によって実現され，構想にあたるコンセプトが，デザインが完成する段階になって初めて明確になることを示した。

最後に，第６章では，不確定性下における価値実現に向けた構想が段階的に形成されること，および計画，経験，認知枠組みがガイドとして機能し，それが創発的な学習を繰り返し方向づけていくことを，論文の結論として提示した。そして，この研究の貢献と限界について検討し，今後の課題について述べた。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，不確定性下での構想の形成過程について明らかにすることを目的とした複数事例による探索的研究である。製品開発マネジメント，新規事業開発のマネジメント，創造性のマネジメントという3つの文脈での事例研究を通して，製品や事業などの人工物が形作られる際に，構想がそれと並行して創発的に形成されていくことを示している。追試の枠組みによる比較研究という研究デザインを採用し，文脈が異なる複数事例研究を実施することで，単一事例研究では迫ることのできない探求を実現している点に特徴がある。

この研究の特に評価すべき点は３つある。第一に，不確定性という独自の概念を不確実性や曖昧さなどと区別して問題としたうえで，具体的な事例を複数提示し，事業や製品の構想が不確定性下での意思決定にどのように関わっているのかを示したことがあげられる。このことで，構想というイノベーション研究で主に議論されてきた概念について，不確定性下の意思決定の効率化という，戦略論や意思決定論のより一般的な枠組みに拡張して議論することが可能となっている。

第二に，不確定性下の構想形成という問題を設定し，経営学の異なった領域で議論されてきた構想，計画と創発性の関係について，分野横断的にレビューしたうえで整理した点である。経営戦略論，組織学習論，イノベーション経営，ベンチャー企業論などの分野それぞれへの理解が求められる野心的な取り組みであり，意義ある課題設定であったと評価できる。

第三に，不確定性下に，その選択肢を限定して探索を効率化しているはずの構想が，実際には選択肢の絞りこみに合わせて段階的に形成されているというメカニズムを明らかにしたことである。その意味で，構想が不確定性下の意思決定においてどのように機能するのかという問題に再度戻らなければならなくなったものの，それを含めて構想が事業や製品の開発と並行して徐々に形成されることを示した点は評価できる。

このように，この論文は，不確定性下での構想の形成過程という独自性の高い研究課題について解明することを目的とし，興味深い事例を用いて議論を展開している研究であるが，いくつか問題も残されている。

第一に，構想と計画，創発の関係という経営学領域で異なった文脈で議論されてきた広範な文献をあたって整理を試みたことは評価したいが，議論が十分整理されておらず，特に計画と構想の関係についての議論に混乱が見られる点である。行為をガイドしているはずの構想が，行為によって形成されてもいるという再帰性の問題について，さらに踏み込んで考察した議論を明示すべきであった。

第二に，この論文の事例研究において，収集された一次データが限られていることもあって，構想が具体的にどのように変化したのかについての記述が不足しており，構想形成というこの論文の中核をなすはずの事実の提示が不十分であることがあげられる。事業や製品が定まっていくのと並行して構想が段階的に形成されることを主張するためには，構想の変化について，より明示的に記述できているべきであった。

第三に，研究課題に対して，この論文では限定的な答えを示すにとどまっている点があげられる。不確定性下に構想がどのような役割を果たしつつどのように形成されていくのかという複雑な問いに対して，この研究で示した回答，すなわち構想形成自体が段階的であることや，計画が行為をガイドすることで構想と事業・製品の創発が並行して実現していくというメカニズムの指摘は，問題に対する答えとしては十分とは言えない。事例記述，理論的考察の両面をさらに掘り

下げ，より明確な学術的貢献を示すことが必要であろう。
　以上のような問題点はあるものの，これらはこの研究のさらなる研究によって解決が期待される課題というべきものであり，不確定性下での構想の形成過程を探求したこの論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお，令和３年２月２４日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。